現代日本紀行文学全集

補巻 1

ほるぷ出版

現代日本紀行文学全集　補巻1

監修　志賀直哉
　　佐藤春夫
　　川端康成
　　小林秀雄
　　井上靖

発行日　昭和五一年八月一日　発行

発行所　東京都新宿区新宿二―一九―一三
電話　東京〇三―三五四―七〇三一（代）
株式会社　ほるぷ出版
代表　山浦喜三夫

総発売元　東京都新宿区新宿二―一九―一三
電話　東京〇三―三五六―六二一一（代）
株式会社　ほるぷ
代表　中森蒔人

制作　東京連合印刷株式会社

NDC 915.8 194 mm×138 mm p. 467　52.1

目

次

〔東北〕
十和田湖　大町桂月　3
遠野物語　柳田國男　15
羽後の海岸　田山花袋　45
はて知らずの記　正岡子規　52
松島に於て芭蕉翁を讀む　北村透谷　69
〔関東〕
紅葉の旅　大町桂月　72
松風日記　大和田建樹　81
剣崎沖の風　幸田露伴　86
ふところ日記　川上眉山　91
湯ヶ原ゆき　國木田獨歩　104
〔中部〕
不二の高根　遲塚麗水　112

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

清見潟日記　高山樗牛　117
清見潟の一夏　姉崎嘲風　124
峯山の故郷　笹川臨風　142
『更科紀行』の跡　荻原井泉水　151
煙霞療養　尾崎紅葉　163
北國紀行　柳田國男　212
金澤行　長谷川如是閑　254

〔近畿〕

湖畔の秋　馬場孤蝶　275
紅葉狩　德富蘆花　278
奈良より　島村抱月　285
『野晒紀行』の跡　荻原井泉水　292
月ヶ瀬紀行　饗庭篁村　314
葛城山の雨　幸田露伴　328

泉州行脚　長谷川如是閑　345

〔中国・四国〕

小泉先生の舊居を訪ふ　厨川白村　364

島二題　若山牧水　369

〔九州〕

歸省　宮崎湖處子　377

南國巡禮　新村出　436

補

巻

1

十和田湖

大町　桂月

一　五戸

本州の北に盡きむとする處、八甲田山崛起し、その山脈南に延びて、南部と津輕とを分ち、更に南下して、東海道と北陸とを分ち、なほ更に西に曲りて、山陽道と山陰道とを分つ。長さ數百里、恰も一大長蛇の如し。中國山脈は、その尾也。甲信の群山は、その腹也。八甲田山はその頭也。頭に目あり。凡そ三里四方、我國の「山湖」にては最も大なる者也。之を十和田湖と稱す。

鳥谷部春汀、一日、來りて我を訪ふ。日光に遊びたりといふ。珍らしや、君の如き旅行嫌ひの人が日光に遊ぶとは、さても如何なる風の吹きまはしぞと云へば、日光を見て結構を說きたくもあれど、別に理由あり。我れ此度、久しぶりにて歸省し、母を迎へ來らむとす。そのついでに、君を我鄕里の十和田湖に案內したしと思ふ。われ少時、しば〳〵遊びて、以爲へらく、天下の絕景と。されど、他の勝地を知らざれば、これ或ひは獨り合點なるかも知れず。依りて比較して見むとて、世に名高き日光に遊び、華嚴瀧や中禪寺湖を見たるが、わが十和田湖は、之にまさるとも、劣らざることを確信しぬ。請ふ、來り看よといふ。これ余に取りては、所謂下地は好きなり、御意はよしといふもの也。喜び勇んで、之に應ず。

長谷川天溪も同行する筈なりしが、その兒の病氣の爲に果さず。春汀と平福百穗と余の三人、明治四十一年八月二十六日を以て、程に上る。海岸線を取りて、翌日午後、尻內驛に下る。浦山太郎兵衞氏、三浦道太郎氏、關根數衞氏、學生五六人來り迎ふ。三浦氏と一行三人と車をつらねて、五戸に向ふ。これ春汀の鄕里也。維新前は、南部藩の代官の居りたる處にて、文武共に振ひたりとぞ。五戸の男女學生凡そ百人、村境に來り迎ふ。松尾由郎氏の家にいたる。春汀の義兄也。快濶豪放にして善く談じ、優遇到らざる無し。醫を業とす。青年會の會長たり。江渡又兵衞氏、鳥谷部健之助氏來たる。みな春汀の親戚也。今孃の酌にて、快く飲む。由郎氏の弟、松原宙次郎氏は、酒豪也。大西喜三郎、內藤信男、福士秀雄の三氏、青年會を代表して來たる。麥酒と青森名產の林檎とを贈らる。醉後、江渡又兵衞氏と碁を鬪はす。八百年來、血統正しき五戸第一の舊家なりとぞ。その顏、武者繪の如し。

二　天滿館

二十八日午前、青年會の求めに應じ、その會場に充てたる小學女子部の校舍に赴く。松尾由郎氏開會の辭を述べ、春汀と余と演說す。こゝは、懸崖の上也。もと代官所のありたる處なりと聞く。松尾氏兄弟、大西喜三郎氏、江渡富郎氏など余等一行を導いて、天滿館に至る。五戸川の流域の上部を見下し、遙に八甲田の連峯を望む。綠陰に蓆を布いて憩ふ。この地第一の淸水と稱せらるゝ天滿水を汲みて茶を煮る。風涼し、快甚し。

松原宙次郎氏、脚下の人家を指して曰く、これを五戸の下町と稱す。享保年間、鈴木新兵衞といふものあり。この村の水帳を預る。一惡漢、金を竊まむとて、夜その家を燒く。新兵衞出づるに路なし。水帳を地に埋め、腹を其の上に當てて燒死す。身死して、水帳は全きを得たり。代官感じて、之を追賞せりと。われ現に其の地を見わたして、感ます〳〵深し。士魂あるものと云ふべき哉。

歸路、菊池萬之丞氏の別莊に小憩し、午後、五戸有志者の求めに應じ、其の會場に充てたる專念寺に赴く。五戸村役場助役金澤次郎氏開會の辭を演べ、春汀と余と演說す。來り會せしもの凡そ百人。

松尾氏の家にやどること二夜、百穗は、諸氏の求めに應じて、扇に揮毫し、われ之に題す。五戸にては、扇一朝にして賣り切れとなり、揮毫を乞はむとするも、扇を得るに由なかりし人も多しと聞く。二十九日の朝、松尾由郎氏、江渡又兵衞氏、青年會の幹事諸氏、青年少年の男女學生に、村境まで送られて、われらは終に五戸の地を去りぬ。

三　宇樽部

いよ〳〵目的地たる十和田湖に赴かむとて徒步す。三浦道太郎氏、江渡省三氏、松原宙次郎氏、春汀の弟良太氏に、余等一行を加へて、同行七人。三浦氏は東道の主人也。江渡氏は、われら、山を下らむ後、三本木に導かむとて、わざ〳〵來れる也。

戸來村にいたれば、小坂甚督、小坂甫三、見瀧源衞諸氏、一行を路に待ちうけ、小坂學校にて酒菓を饗す。一行求めに應じて揮毫す。休息すること凡そ三時間にして去る。牛の首峠を越ゆる頃、日暮れたり。提燈と藤の皮松明のもとに路を照して、午後十時、十和田湖畔の宇樽部に着し、三浦氏の家にやどる。道太郎氏の父泉八氏は、明治十六七年の頃、はじめて五戸よりの道路を開き、船を造りて、小坂鑛山の貨物運搬を請負ひ、宇樽部を開墾せる人也。人家今二十四五軒、水田あり、陸田あり。農民は耕作の外、湖に漁し、山に獵す。泉八氏は、山上の一王者といふべき哉。げにや、塵外の別天地、盜賊の難なければ、夜、雨戸を鎖さず。病む者なければ、醫藥の必要もなし。われ明治十三年までは、土佐の城下に生長しけるが、夜、雨戸を鎖さざりき。知らず、今猶ほ然るや、否や。

四　休屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三十日、休屋さしてゆく。道太郎氏の子一雄氏、從弟小平四郎氏、あらたに加はる。共に少年の學生也。宇樽部より休屋まで、凡そ一里、老樹しげる。桂の大木も多し。蛇麻の花黄に、冠草の花紫也。車草、こゞみの生ひたるにても、日光に遠きことは知られたり。思ひがけずも、休屋の鈴木尙信、中村秀吉、川村藤五郎三氏、男女の生徒をつれて、われらを途に迎ふ。好意は細徑の草にもあらはれて、苅痕なほ新た也。

休屋は、十和田諸部落の中心點也。十和田神社こゝに在り。奇景このあたりに集まる。祠官にして、兼ねて宿屋を營める織田興次郎氏の家にいたる。酒肴の饗應を受け、織田氏に導かれて出づ。十和田湖畔、杉は、唯〻こゝのみにありて、並木を爲して長くつゞく。十和田神社に詣づ。日本武尊を祀る。險しき巖山を攀づ。山に臨みて、南祖坊と、八郎太郎との祠あり。九間の鐵梯を下り、御占所にいたりて、中海に俯し、水を隔てゝ、御倉山を望む。學生四人、船に在り。みな五戸の人、われらを慕ひて、相前後して來り遊べる也。一行も之に乘りて船を發し、中海西岸の斷崖を見上げ、水中に孤立せる蠟燭岩あたりにいたりて、船を返しぬ。十和田湖前より別路を取り、大黑天、天の岩戸、金の神、山の神、火の神、風の神などの巖窟を見て、西海の濱に出で、近く惠比須島を見て歸途に就き、織田氏の家に小憩して、黄昏の頃、宇樽部に歸りぬ。

五　巖上の酒宴

十和田湖は、四面、山に圍まる。銀山、鉛山西にあり。東にありて最も高きは十和田山、南にありて最も高きは前山、北にありて最も高きは花部山也。大日本地誌に據るに、湖面は海拔四百五十米突、花部山は九百六七十米突なり。湖は北方最も廣く、岸の出入もなくして、幾んど半圓形をなす。東西凡そ三里、南は三大灣を爲す。東海、中海、西海、これ也。大さ、ほゞ相同じ。宇樽部は東海の南濱に在り。左に御倉半島の端に崛起せる御倉山を望み、左に十和田山を望み、前に花部山を望む。花部の右に二峰首を出す。西を乘鞍嶽と云ひ、東を赤倉山と云ふ。四周の山、すべて官有に屬す。樹木の盛んに繁れること、他に其の比稀れ也。みな落葉樹也。晩秋にいたれば、紅幕碧湖を圍む。同じ山湖にしても、この湖の大は、日光の中禪寺湖の三倍以上あり。路は湖をとりまきて通ず。凡そ十里。沿岸の長さは、十五里に達す。

三十一日朝、昨日の一行、船に乘りて、宇樽部を發す。春汀ひとり留る。持病の痔起りて、出血甚しきをも顧みず、勇を鼓してわれらの爲に山にのぼりけるが、この日一日は、靜養せむとすれば也。十和田の景は、その熟知せる所なれば也。舊知三浦泉八との話も多ければ也。

御倉山の端をめぐりて中海に入り、ゆくゆく御倉半島の斷崖を仰ぐ。こゝは中海の東岸也。斷崖直ちに湖面に立ち、崖高く、水深し、且つ淸し。兩手にてかゝへるばかりの石を、岸より崩して水に落し、俯して之を見るに、恰も魚の如く、ひら〳〵と沈みゆき、鯛大となり、鰯大となり、金魚大とな

り、終に見る能はざるに至る。船夫曰く、十和田湖中、此の中海が最も深し。曾て百尋の繩を下しけるに、水底に屈かざりきと。地理學者の說に據るに、十和田湖全體は、陷落より生じたるが、此の中海は、噴火口也と。日暮崎を始めとし、崖の突出せる者多し。崎といふよりも、むしろ巖といふべし。いづれもみな巨巖也。而もみな姫小松を帶ぶ。一窟あり。御室と稱す。窟中二條に別る。いづれも數間にして盡く。劍の如き小石の簇立せる岬を劍岩と云ひ、姫小松の林を成せる岬を千本松と云ふ。赤根崎よりは、斷崖赤色を主として、いろいろの色を帶び、十數町も長く南に延びて、半空にかゝる一大長虹の如し。余はこの中海の東岸にありては、最も御倉山を取る。千尺の斷崖、西北より起り、南をめぐりて東に至り、一山をとりかこむ。長さ二十四五町もあるべし。此の如きは他に其の類を見ず。何か名あるかと問へば、無しといふ。千丈幕と名付けては如何にと云へば、みな可と稱す。百間幕なら、他にも多くあり。千丈幕は、御倉山の特色にして、かねて十和田湖の一特色也。この一大斷崖の爲に、人は陸地よりこの山に上る能はず。滿山みな樹、十和田湖畔、猿は、たゞこの山にのみ住む。秋晩木の實熟する頃は、群猿夜月に叫ぶ。賽者對岸の御占所に米を投じて祈禱するに、祭日には、白氣この山に上ると云ひ傳ふ。唯々眺めたるのみにても、十和田湖畔、唯一の靈山也。

看て千本松に到りける時、日章旗をかゝげたる白帆來たる。これ休屋一村の人士が余等を歡迎する也。中海の南岸は、他の奇なし。西岸は、昨日舟にて見物したり。東岸に比すれば水淺し。斷崖の景致も、劣れり。直ちに最北端の巔に漕ぎつけて、一同之に上る。ここに休屋一村の好意より成れる饗宴ひらかれたり。主人側は、織田與次郎、中村春吉、鈴木尙信、川村松五郎、栗山政治の諸氏也。主賓うち解けて、快く醉へり。こゝを中山崎と稱す。この半島全體を小中山と稱す。中海と西海とを隔つる小連峯也。宴罷んで、一同休屋の舟に乘りて、中海と別る。中海は、凡そ一方里、北は湖心に連なり、東西南の三方は斷崖と蒼樹とに取り圍まれたる、別天地中の別天地也。

西海に入りて、東岸近く舟を進む。忽ち、どぶんと水に入るものあり。祠官の織田氏也。主既に俑を作す、賓いかでか之に倣はずして止むべき。余之についで水に入る。三浦道太郎氏も泳ぐ。その他、數人同じく泳ぐ。この西海の東岸は、水、中海の東岸の如くには深からず。崎には、六方角の相竝べる處もあり。島多し。ぐみ島、蓬萊島、種ケ島、鎧島、兜島、惠比須島など、これ也。大あり、小あり、高あり、低あれども、皆巖也。而していづれも姫小松を帶びざるは無し。松島には、この樹ありて、この巖なく、雄鹿半島には、この巖ありて、この樹なし。天下の風光、十和田湖ひとり其の美を擅にす。舟をすてゝ、自籠神社にいたる。數十丈の孤巖の上に在り。三たび鐵梯を攀ぢて、漸くにして達す。幾んど天に昇るの思ひあり。妙義の大字巖、旭日嶽にも、この奇なし。況んや水あるをや。

薄暮、織田氏の家に至る。江渡省三、鳥谷部良太、小平四郎、三浦一雄の四氏は、宇樽部さして歩して歸る。三浦道太郎氏、松原寅次郎氏、百穗及び余は、織田氏の好意のまゝに、その家にやどる。夜、宴また開かる。宴酣にして、歌聲樓外に起る。見れば、數十人圓くなりて踊り且つ歌ふ。これ盆踊にして、村民一同が余等の旅興を添へむとする也。

六　疊石

明くれば、九月一日也。三浦氏一族の二少年、宇樽部より來たる。織田氏を辭して、共に舟に乘り、追手といふ處に至り、和井内貞行氏の孵化場を見る。今は孵化の時機にあらず。酒精漬の標本あり。卵より魚の形を成すまでの順序、精しく示さる。和井内氏は、カバチェポと稱する北海道の鱒をとりよせて、此處に養殖すること年あり。この湖の水、このカバチェポに適すと見えて、生長の速かなること、本元よりも優れり。和井内氏の名を付す。本土にこの鱒あるは、唯〻こゝのみなりとぞ。功により、綠授褒章を賜はる。われこの山上に來りてより、日々新鮮なる鱒に舌鼓うつ。多謝す、和井内氏の賜物也。

舟を湖の中心に出す。浪、荒し。幾んど御倉山と花部山の中央とおぼしき處に、二大巖わづかに其の頭を露はして相竝ぶ。その間、凡そ二十間、下は、其の底を見ず。之を御門石と稱す。更に舟を進めて湖の東岸に到り、疊石を見る。東西十間、南北百間ばかりの大磐石、水面より高きこと、わづかに五六寸にして平らか也。なほ續きて、南にも、北にも、百間あまりは、水に沒することも五六寸にして平らか也。この巖上、數百千人を載せて餘りあり。洵に稀有の大磐石也。後にて聞けば、この附近に、碁盤石と稱する者、水面の下にあり。碁盤形を成し、下の四隅に足さへありとぞ。造化の奇を弄する亦甚しい哉。

薄暮、三浦氏の家にかへれば、江渡氏と春汀兄弟とはあらず。この朝、三本木方面さして山を下り、蔦溫泉にてわれを待ちあはさむとする也。

七　花部山

九月二日、われらは下りて、蔦溫泉に春汀等と相會せむと期したるものゝ、われ新たに一動議を起しぬ。われらは、幾んど殘る隈もなく、横に十和田湖を見つくしたれど、なほ此の上にも、縱に十和田湖を見下ろさずんば、未だ全く十和田湖を見たりとは云ふべからずと云へば、百穗も贊成し、三浦氏も贊成す。さらば御倉山にせむか、十和田山にせむか、花部山にせむかといろ〳〵考へたる末、終に花部山に決す。

松原寅次郎、小平四郎の二氏は、別れて、五戸に向つて去りぬ。三浦道太郎氏父子、百穗、及び余の四人、舟に乘りて湖の東北隅の靑ぶなといふ處に上陸す。こゝに牧場あり。群羊、湖畔に眠る。番小屋に到り、湯をわかし、午食して發足す。舟夫二人、その一人導を爲す。凡そ三十町、湖岸を離れて山に上る。牧牛の往來する處、自然に路を成して歩きよか

りしが、山骨の削立せる處を攀づれば、牛も至る能はず。從つて路なし。山全體に老樹しげる。その十中七八は、山毛欅也。上るに從つて、地竹密生す。細雨下る。木葉にたまれる水、風に從つて大滴となりて落つ。地竹や雜木を押しわくれば、なほ一層散ること繁く、恰も水中を行くが如し。漸くにして、頂上とおぼしき處に達したれど、濃霧の爲に、少しも眺望なし。蚋にや、顏にたかり、手にたかる。全身うるほひて、冷氣骨に徹す。うるほひの少なき枯竹を集めて火を點ずれば、うるほへる枯木枯竹も燃ゆ。四人火を圍み、暖を取る。蚋も去りて、近づかず。導者は火にもあたらず、あちこち歩きまはりしが、地竹を四本切りて、もち來たる。杖にせよとなり。根本の直徑七八寸もあり。思ふに、數百年の星霜を經たるものなるべし。一時間も火にあたりけるが、日暮れぬほどにと立ち去らむとすれば、導者はあらず。歸りは易かるべしと思ひの外、導者なくして、方角を失し、密林の中に迷ふ。唯〻幸にも、青森、秋田二縣の界とて、十間ぐらゐ毎に小さき木標あり。漸く一標を見出しては、次の一標の方角を考へ、その一標を得て、また次の一標を考へ、上りし時の記憶にもよりて、漸く牛路のある處に來たる。導者、われらを待つこと久し。己れの熟知せるに慣れて、われらの迷はむとは、思もかけざりし也。寒山が「智者君拋レ我、愚者我拋レ君」と歎息せしも、これにや。

此日、濃霧の爲に、眺望を得る能はざりしかど、十和田湖を見下ろす處を花部山と定めたる考へだけは誤らざるべしと確信する也。

八　奥入瀬の溪流

三浦氏父子に優待せられて宇樽部に宿ること四夜、休屋一村の好意をうけて休屋に宿すること一夜、都合五夜にして、われはこの趣味多き十和田湖を去りぬ。九月三日也。道太郎氏父子、百穗、及び余の四人、一人の男、荷物をもちて從へり。遂に小笠原圓吉、太田吉司二氏の蔦溫泉より來り迎ふるに逢ふ。昨日も迎へに宇樽部まで來りて、空しく歸りし也。

湖水の川となりて流れ出づる處を根の口と稱す。この流を奥入瀬川と稱す。橋かゝる。長さ十三四間。水は緩く流る。水中の魚も見るべし。右岸を下る。路も緩やか也。十三町にして、根の口の瀧にいたる。奥入瀬川の斷崖に一落する也。高さ三丈、幅十丈。三里四方の十和田湖の水が集まりて落つることなれば、水量は多し。幅の廣きことだけなら、他にも其の類少なからず。殊にナイヤガラの寫眞見たる目には慊らぬ心地す。されど、この溪流は、他には見難き風致を有す。湖口より蔦川を入るゝまで凡そ三里、島多し。みな木を帶ぶ。巖の水中に立てるものも多し。それもみな木を帶ぶ。これ奥入瀬溪流の特色也。溪流は普通、勾配急に、水の增減甚しく、水中に巖あるも、木を帶ぶるに由なき也。ひとり奥入瀬の然らざるは、幾んど勾配なき迄に流れ緩やかにして、十和田の全山、木しげるが爲に、絕えて洪水なく、殊に老樹天を蔽ふに由る也。さればとて、時に急湍もありて、單調にはあらず。

げにや、三里の間、山毛欅、桂、楢、栃などの大木しげりあひ、女蘿かかる。仰いで天を見ず。下には、こゞみ茂る。紫陽花や、蛇麻の花さきたり。如何なる炎天とても、こゝを上下する者は、絶えて夏あるを知らざるべし。左右は、斷崖也。瀑布を帶ぶ。白布瀑を最も美觀とす。白絲瀑、姉妹瀑、棚瀑などは、その名あるものなるが、未だ名のつかざるものも多し。高さいづれも十丈にあまる。木繁れるが爲に落口の見えざるものあり、下部の見えざるものもありて、益〻奥ゆかしく感ぜられる。十和田湖に遊びて、この溪流を見ざるものは、未だ十和田湖を見たるものと云ふべからざる也。

川畔に、大石、自然に屋となりて、十數人を容るゝに足るものあり。太田氏曰く、これ鬼神お松の潛みし處なりと。

奥入瀬川も、蔦川を入れてよりは、普通の川となる。こゝには危橋あり。猿橋と稱す。斜に生へたる大木を利用し、その木の半ば頃より丸太を彼岸に掛け渡す。人は木を攀ぢて丸太を渡る。一種奇妙なる橋也。されど、手のつかまる木もあり、銅線もありて、さばかり危險なることは無き也。

蔦川の左岸を上ること半里、通天橋をわたりゆくこと又半里にして、蔦溫泉にいたる。午後八時也。春汀兄弟は、既にあらず。江渡省三氏ひとり留りて、われを待てり。法奥瀬村の村長小笠原耕一氏も、わざ〳〵來りて我を待ち、酒肴を饗せらる。この溫泉は、氏と小笠原圓吉氏との經營する所に係る。この頃、家を建增し、路を普請して、三本木より人力車を通ずるやうにせり。泉質は鹽類泉也。

九　松見の瀑

太田吉司氏は、體格强壯無比、脚殊に健也。このあたりの山々、足跡の及ばぬ隈もなし。數日の糧をもちて、ひとりにて行くこともしばしば也。「山の神」と稱せらる。日に何里あるけるかと問へば、五里ぐらゐなりといふ。如何に「山の神」とは云へ、げにさもあるべし。路のなき峻山を五里もゆくは、平地を十五里ゆくよりも困難也。太田氏曰く、このあたり瀧多し。見るに足るべきの瀧、二十に下らず。就中、松見の瀑が、最も大也。請ふ、往いて見られよ、われ案内せむと、こゝも十和田の區域也。見ざるべからずとて、之に應じぬ。

蔦溫泉に一夜とまりて、明くれば雨也。太田氏曰く、松見の瀑へゆくには路なし。溪流を徒歩すること四十回、水增せば、往くべからず。この雨にては危險也。明日に延ばされよと、さらば、仕方なし。鄕に入つては、鄕に從へ、山に入りては、唯〻「山の神」の命令を奉ずべしとて、其の言に從ふ。春汀の待ちわぶることは察せざるにあらざるも、この行、十和田の風光を探るを主とせることは、春汀も承知の上なれば、われは、主とする所に從いて、春汀に負かむとする也。

午前十時に至りて、「山の神」又來りて曰く、この模樣ならば、往かるべし。雨を衝く勇ありや否やと。大いに有りとて起つ。百穗が惠與の眞綿を背中に入れ、綿入を借りて着、頭には「ばをり」を被り、脚には「はゞき」をつけ、蓑を着る。

太田氏先にたち、一人の男、後ろより余を護衛してゆく。

路なき山を幾度か上下して、黄瀬川の溪流に出でたるまでに、一時間半かゝりぬ。こゝよりは、太田氏の云ひし如く、四十回黄瀬川を徒渉する也。左岸に瀧多し。その中にて、鍋倉の瀑といふは、はじめ二丈ばかり奔流し、直ちに噴水の如く、斜に飛び上り、三丈ばかりして巖壁に當りて、五六丈の懸崖を瀉下す。素人受けのする奇瀑也。

小石の洲ありて、水左右に流る。こゝを御所河原と稱すといふ。名が面白しとて、休息して、酒し飯す。一瓶の酒なほ餘る。瀧壺まで持ち行かむかといふ。いや〳〵、瀑を見るに酒なかるべからずなどいふは、まだ風流の半可通なるものなりとて、荷物は總てこゝに置きて、また上る。

松見の瀑、一に黄瀬の瀑とも云ふ。一山全く骨を露はし、上は裂けて鋏の如し。其の合する處より、一川の水、總束せられて直下す。凡そ二十丈、下はまた五六丈の巖を蔽うて下る。此の上方の、二つに裂けたる巖の山は、姫小松を戴く。後ろを見れば、巨巖天を衝きて、それの頂にも、姫小松生ひたり。このあたりの山々には、松なし。たゞこゝのみにあるを以て、松見の瀑といふなりとぞ。岩質はと問へば、玄武岩なりといふ。巖に松、而して三十丈の飛瀑と云ふのみにても、山水の遊に慣れたる者は、既に飛び立つ思ひすべき也。

午後七時十五分、溫泉の宿にかへる。午食に三十分、瀧壺に十分休息し、正味八時間半は、少しも休息することなく、歩き通しに歩きたるが、里程は、わづか往復四里ぐらゐなるべし。

一〇　三本木

九月五日、朝早く起き出でて、一二町隔たれる湯沼に赴く。くりぬきあり、棹もありたれば、棹してゆく。水は澄みたり。底は粘土らしく、棹しても濁らず、鯉や金魚の泳ぐを見る。林山四面を圍み、幽禽相和して鳴く。沼の廣さ七町。靈泉に加ふるに、この神仙の苑あり。唯〻地僻なるが爲に、世に知るもの稀れ也。

三本木へとて、出で立つ。耕一氏の父幸七氏、叔父善吉氏、門に送る。子の新吾氏、東北學院の學生なるが、余等と共にす。「山の神」も共にす。一人の男、一行の荷物を負へり。われ春汀との約に負きて、空しく待たさしむること三日。今日は、相逢ひて、罪を謝せざるべからざる也。

思ひがけずも、法奥澤村の有志者、われらを路に要し、一亭に延いて酒を侑む。村長の小笠原耕一氏を始めとし、鈴木斂夫、中山留五郎、相澤寧、小笠原松次郎、太田寛造、奥山東一、角田健一、目時寛三、鈴木友記、東長五郎の諸氏、づらりと居竝ぶ。御話をうけたまはらむとて、上級の生徒を休ませて、引きつれたり。之を諾されよといふ。話す種はなけれど、いやとも云へず。生徒數十人來り竝ぶ。われ大いにまごつきぬ。如何なることをか、しやべりけむ。相澤寧氏は醫者にして、俳句をよくす、曉村と號す。日本派の俳人也。余を迎ふるの句をおくらる。珍らしや、今迄は、到る處、たゞ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com